

JICA 研修員と大学生のディスカッションを通じた学び —独立行政法人国際協力機構 (JICA) 平成21年度集団型研修「学校保健」から—

藤井千恵

養護教育講座

Learning through the Discussion between JICA Participants and University Students

Chie FUJII

Department of School Nursing and Health Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

I. はじめに

独立行政法人国際協力機構 (Japan International Cooperation Agency: JICA) では、途上国の研修員が日本の学校保健制度や学校における取り組みを理解し、自国の学校保健システム改善に資する政策・制度に係わる示唆を得て、自国内の関係者に普及させることを目的として集団型研修「学校保健」コースを平成18年度から全5回の予定で実施している。平成21年度はその4回目であり、本邦における研修期間は平成21年5月17日～平成21年7月4日で、11ヶ国 (エジプト, コートジボアール, ガーナ, ベナン, カメルーン, ケニア, ザンビア, 南アフリカ, グアテマラ, ネパール, ラオス) 14人の研修員を受け入れた。

愛知教育大学養護教育講座では、途上国の研修員が自国の学校保健の現状を報告するジョブ&インセプション・レポート発表会 (国際学校保健セミナー) に平成18年度 (1回目) から臨床実習の一環として養護教諭養成課程第3学年の学生を参加させていただき、途上国における学校保健の現状を学生が理解し、日本における養護教諭の役割や学校保健制度について考察する機会を得てきた。平成19年度からは、集団型研修「学校保健」のプログラムのなかに途上国の学校保健を推進する上で重要な視点である「健康観察/救急処置」研修を組み入れて筆者が担当し、平成20年度からは、本学養護教諭養成課程の授業および施設見学を研修に組み入れて日本の養護教諭養成の実際を研修員に理解していただく機会にした¹⁾。

そこで平成21年度は、学生を小グループに分けて担当国を決め、事前に各国の保健衛生統計情報等を調べ

た上で研修員が自国の学校保健の現状を報告する会に参加し、さらに研修員とのディスカッションや救急処置の実習に臨むという試みを実施した。この試みを通じた研修員と学生の学びや感想を聴取し、今回の取り組みの成果について検討した。

II. 方 法

1. 国際学校保健セミナー2009'からの学生の学び

学生は、事前に各国の保健衛生統計情報や経済情報等を調べてレポートにまとめた上で国際学校保健セミナーに参加し、担当国の報告を中心に途上国の学校保健の現状について学んだ。その発表会に参加した学生のふりかえり記録からどのようなことを学習したかをまとめた。

2. 「健康観察/救急処置」研修における研修員の学び

本学において、JICA 学校保健コース「健康観察/救急処置」研修を実施し、参加した研修員のコメント記録からどのような研修の内容が参考になったか等をまとめた。

3. 授業および施設見学における研修員と学生の学び

本学養護教諭養成課程の授業および施設の見学と救急処置の実習に研修員に参加していただき、研修員のコメント記録からどのような授業の内容が参考になったか等を抽出した。また、学生のふりかえり記録から研修員が救急処置の実習に参加したことに対して学生がどのように感じたかをまとめた。

4. ディスカッションにおける研修員と学生の学び

担当国の研修員と学生が4～5ヶ国ずつグループになってディスカッションを行った。ディスカッションの内容は、国際学校保健セミナー2009'の報告に対する学生からの質問や養護教諭を目指す学生に対する研修員からの質問などについての意見交換であった。研修員のコメント記録と学生のふりかえり記録からそれぞれの学びについてまとめた。さらにディスカッションに同席した財団法人日本国際協力センター（JICE）研修監理員（通訳担当）からもコメントをもらった。

Ⅲ. 結 果

1. 国際学校保健セミナー2009'の概要と学生の学び

(1) 国際学校保健セミナーにおける研修員のジョブ&インセプション・レポートの項目

1) 所属組織・現在の職位・職務内容

2) 国レベル

①学校保健の指針, ②学校保健の担当省庁, ③国内の学校保健の概況, ④現在の課題

3) 本人が所属する機関, 対象とする地区レベル

①学校保健の担当部署, 職位, ②保健教育プログラム, ③学校の環境管理, ④学校給食, ⑤健康管理室, ⑥現在の課題, ⑦現在実施中の学校保健プロジェクト等

研修員の自国での立場は、保健省あるいは教育省等で学校保健に関係した部署に所属している事務官や医師等であった。

(2) 学生のふりかえり記録から抽出した学び

- ・子供たちが過ごしている環境の劣悪さに驚いた。なぜ児童に校内の清掃をさせないのか疑問を感じた。
- ・清潔な水が不足しているため、手洗いや器具の消毒などが不十分で衛生状態が良いとはいえないと思った。
- ・日本では新型インフルエンザで大騒ぎをしているが、途上国ではいろいろな感染症が蔓延していても、薬がなくて治療ができなかったり、予防が十分でない現状があり深刻と思った。
- ・アフリカ諸国の中でもずいぶん差がある。また、どの国も地域によって差があり、設備の良い地域とそうでない地域の格差がある。まずはどの国も最低レベルの設備を整えて、衛生状態が改善されるとよいと思った。
- ・病院など処置ができる施設が少なく、手術を行うことができる施設はさらに少なく、急な手術が必要な場合に近くに病院がない時はどうするか考えさせられた。
- ・給食は子供の就学率に大きな影響を与えていた。また、学校に行かせるよりも働かせたいと考える親が多いという現状を聞き、親の意識への働きかけが必

要だと思った。

- ・途上国における学校保健では、予防よりも治療を重視した方針であると強く感じた。保健室を設置する以前の問題として人手不足、資金不足がどの国でも挙げられており、政府がもっと学校保健に力を入れなければ改善できないと思った。
- ・日本よりエイズに対しての教育を行っていた。
- ・ペロニカバケツ（蓋付きバケツ）は衛生面で不都合はないと説明していたが、疑問が残った。
- ・各国を代表する研修員が日本に来て日本の学校保健のシステムを学んでいる現状を見て、日本の学校保健の環境は恵まれていると感じた。また、子供を育てるのは未来を作ることにつながっており、その子供たちを健康に保つために努力をしている各国の研修員たちは素晴らしいと思った。
- ・“No School without Healthy”という、コートジボアールの研修員の言葉が印象的であった。健康ということが、学校生活の前提としてあることは養護教諭として大切にしていきたいと思った。
- ・途上国では、健康教育をする先生がいる国やヘルスサポートセンターがあったりと、保健に関する制度がそれぞれにあるが、日本のような養護教諭のシステムがある国はなく、どの国の研修員も日本の養護教諭システムに非常に興味を持っていると感じた。
- ・日本の学校保健制度の中で特に養護教諭制度に注目していることを嬉しく思った。
- ・日本がこれからも学校保健の課題に取り組んでいくことが他の国の手本になると思った。

2. 「健康観察／救急処置」研修における研修員の学び 研修員のコメント記録から抽出した学び

- ・健康観察と救急処置に関する講義では実際の教材やデモンストレーションを見ることができ、日本の学校保健制度をよりよく知るためにとっても有益で興味深かった。また私たちの国のことについて私たちがコメントを出したり、先生が私たちに対して質問してくれる機会もあり、とてもダイナミックでよかった。
- ・プレゼンテーションを通して日本では学校保健がとても発達していることがわかった。健康観察と救急処置に関しては手本として自国に取り入れていきたいことがたくさんあった。先生のプレゼンテーションはすばらしかった。
- ・デモンストレーションや歌があつてよかった。大変楽しい講義であった。実践的に学んだことは自国でも実践したい。
- ・手洗いの歌はとてもよかったので、自国の子供たちに手洗いの重要性を教えるために使いたい。
- ・学校における健康観察と救急処置について多くのことを学ぶことができた。特に児童が緊急手当てを必

要とするときの救急処置方法は帰国後自分の職務改善のためにもとても有益であった。

- ・健康記録手帳は幼稚園から始められ、小学校、中学校と続けられ、児童、保護者、教師がコミュニケーションをとる上で重要なものとわかった。
- ・先生自身の子供たちの健康記録手帳を実例として私たちにを見せてくれるなど、使用した視覚教材は講義の内容と関連性があり、内容をより理解する上で役立つものであった。
- ・学校保健に関する実践的な事例の紹介があり大変よかった。特に児童の健康記録の管理に関しては私たちは少し遅れているので、担当部署として改善していかなければならない。予算措置に関しては中央政府もその必要性を知ってほしい。
- ・私たちが待っていて迎えてくれたのが大変よかった。部分毎に体系的に講義してくれ、説明もデモンストレーションがあってわかりやすかった。はっきりした声でアイ・コンタクトをとり、必要に応じてジェスチャーもあった。講義で紹介されたことすべてを自国で取り入れたい。
- ・とても興味深かった。自国でも児童の健康への対応が日本のようなレベルに達することを願う。
- ・私は自国で養護教諭制度を確立したいと思っているが、神が実現のために力を貸してくれることだろう。現在50%の学校の衛生状態がよくないので、これによってこの数字を低くすることができると思う。

3. 授業および施設見学における研修員と学生の学び

(1) 研修員のコメント記録から抽出した参考になった授業の内容および施設の見学

- ・講義の見学は、午前中の先生による説明と関連して内容を確認するものであった。
- ・校内にある施設・備品を見学し参考になった。自国の現状を JICA 等の支援によって今後改善していきたい。
- ・養護教諭を目指す学生が受けている授業、実習のための教材、施設すべてが印象的であった。設備がそろっていてこうした実習ができれば意欲も高まると思った。
- ・学生が実習しているさまざまな内容を見学してよく理解できた。自国の学校ではこうした実習を行っていないので、新しいことを学ぶことができた。
- ・将来養護教諭になる学生のための保健室の実習室を見学したが、とてもわかりやすく保健室の配置や備品の様子がよくわかった。また子供たちにとって手洗いは病気の予防のために重要であることがわかった。
- ・2年前の2007年に本コースに参加した同僚は日本で視察した保健室を参考にして自国（ガーナ）で保健

室プロジェクトを実現した。視察したさまざまな活動すべてに興味深く教育的なものであった。よい実習を学ぶことができたので帰国後取り入れていきたい。

- ・一次救命処置(心肺蘇生, AED を用いた除細動など)の実習, 手洗いの実習, 保健室の実習室は特によかった。先生方が自分たちの持っている知識と技能を学生に分け与えようと力を注いでいたのはすばらしかった。またこうした先生の姿勢に対して学生も熱心に応えていて、実習による知識の構築は大変よいと思った。
- ・見学ではきちんと案内し的確な情報を与えてくれた。実習室は設備が整っていて管理もよかった。学習の各ステップにおいて補助教材が使われていた。学習環境がすばらしい。学生たちは規律正しく、授業に真摯にのぞみ、実に意欲的に専念していた。衛生面もよかった。
- ・学生が一次救命処置の実習を行ったり、手のバクテリアについて実験する様子を見学できてよかった。備品類はみなよかったが、特に心電図や足の発達状況を調べる機器はよかった。
- ・救急処置の方法は自国の学校でも適用できる。現在いる学校看護師にもこうした研修を実施したい。
- ・学校保健の実践面について学ぶことができた。日本の学校環境にはすべてがあり、それが完璧な学校保健につながっていると思うので、私にとって意欲をかきたてられるものであった。

(2) 救急処置の実習を研修員と一緒に体験した学生のふりかえり記録から抽出した感想

- ・学生が普段授業で実習している一次救命処置の方法について伝え、研修員に一連の流れを体験していただくように一緒に取り組んだ。
- ・頭部後屈あご先挙上法の仕方や胸骨圧迫の手の組み方を実際に行ったり、研修員も楽しそうに参加され、いろいろ興味を持っていただけてよかった。
- ・医師である研修員が学生の行う心肺蘇生法とは手技が異なると話していた。救命処置の違いはなぜなのだろうかと思った。
- ・医師の研修員は AED について他の研修員に説明したりして、いろいろ知識や情報を交換していた。
- ・AED の使い方を一緒に学んだが、途上国にも AED はあるのか気になった。
- ・フェイスシールドや AED について尋ねられたが、通訳がいなかったので正しく伝えることができたのか不安だった。学生は英語が話せず、通訳なしでは、うまくコミュニケーションがとれなかった。
- ・心肺蘇生法等の救急処置は、日本の学校保健の中では基礎的な技術だが、各国の状況に応じて学校における救急処置の方法を統一する必要があると思わ

れ、そのきっかけになったら良いと思った。

- ・一次救命処置の方法を知らない研修員もいたので、途上国では救急処置はどのようにやっているのか、またきちんと行われているのか疑問に思った。
- ・日本の養護教諭養成課程の学生が、どのような教材を使ってどのようなことを学んでいるのかを研修員に知ってもらうことは意味があり、貴重であると思った。
- ・研修員はみなさん熱心で、よく質問をしていた。

4. ディスカッションにおける研修員と学生の学び

参加した研修員のコメント記録から抽出した学びと学生のふりかえり記録から抽出した学び、研修監理員(通訳担当)のコメントは以下の通りであった。

(1) A グループ

1) 研修員の学び

- ・学生がイニシアティブをとってくれて、よい構成であった。学生は我々の国について興味をもち質問をしてくれた。
- ・学生との討論は情報交換の時間であった。いじめは自国では大きな問題とはなっていないが、いじめやその解決方法について学ぶことができた。
- ・学生との討論では、学生が養護教諭になりたい理由(例えば保健室はリラックスする場であるから等)を話してくれて、とても楽しいものであった。学生から日本ではいじめが問題になっていると聞き、私たちの国でどう対処しているのかについても話し合った。また、心の問題についても話し合い、「麻薬乱用にはNO!と一言」ことができるための自国での取り組みを学生に紹介した。
- ・学生はオープンで意識が高く、討論は双方向活発に行われた。こうした種類の討論は相互作用的で説得力を身につけることができる。また一方、世界のさまざまな種類の問題について知ることができる。これは費用対効果が高いばかりでなく、コミュニケーション能力や相手をより理解する力を身につけ、協働の文化をさらに進めることにもなる。
- ・養護教諭養成課程の学生との討論を通して、学生は養護教諭に興味をもっており、子供たちを助けることのできる養護教諭になりたいと強く希望していることがわかった。

2) 学生の学び

- ・各国でもいじめの問題はあるが、その質や対象が違い、あまり重大なものとしては扱っていないところが日本との大きな違いだと思った。いじめや心の病よりも、やはり衛生面や設備の方が途上国では問題なのだと分かった。
- ・どの国にもいじめがあることは分かったが、いじめの重さや教育問題になるかはそれぞれで、日本特有

のいじめの暗さや重さを伝え切れたのかは分からない。日本のような重いいじめ問題にまで発展しないことを願う。

- ・途上国でのいじめは、子供から子供に対するいじめもあるが、教師から子供に対するいじめが多く、教師が強い権限を持っているところは戦前の日本に似ていると思った。そのために“Learn without fear(恐れなくて学校において)”キャンペーンなどを行っていることに驚いた。
- ・研修員の話聞くまで、いじめの問題よりも身体的問題(けが、感染症、視力低下など)ばかりが、途上国の抱える問題だと思っていた。しかし、途上国にも心の問題があって、さらにその問題の解決に向けて、校長などの管理職や保護者、教師が連携している国もあって驚いた。
- ・研修員は、私たち養護教諭を目指す学生に興味を持っていて、私たちの話をうなずきながら聞いてくれて嬉しかった。

3) 研修監理員(通訳担当)のコメント

- ・日本ではいじめが大きな問題になっているので研修員の国ではどうかと聞いたところ、各国の話になり、いじめが討論の中心になった。
- ・いじめの対処法にも各研修員の国の文化の違いが感じられ大変興味深かった。
- ・グループの過半数の学生は、良かれ悪しかれ小学生時代の体験を動機に養護教諭を志望していて、そのような動機を持った学生たちが養護教諭になることは頼もしいと感じた。

(2) B グループ

1) 研修員の学び

- ・学生がリードし、活発な討論であった。学生が討論の進め方を説明するというのはよいやり方で、学生といろいろ共有できた。時間が短く、1時間半ぐらいあったらよかった。
- ・養護教諭養成課程の学生のカリキュラムは、各専門科目の試験に合格しなければ養護教諭の免許が取得できないことになっている。学生は養護教諭を目指し、その専門性をとても気に入っているようだ。
- ・学生との討論の後、このような学生が養護教諭になることを知って嬉しく思った。学生は心から養護教諭として働きたいと思っており、それはお金のためではなく、この仕事を楽しいと思っているからだ。こうした考え方があるので日本の保健教育がこのレベルにまで達したのだと思う。
- ・国によって異なる学校保健活動について学生が興味を示し、知ろうとしてくれていたのがとてもよかった。特に私自身に関しては学生から「なぜザンビアは医師の数が少ないのか」と聞かれたので、「医師に

なる人はいるが、不便な地方での生活を好まず、自分の子供の教育を都会で受けさせたいと皆思っている。都会での快適な生活を好む人が多く、給与的な問題もあるので都市部に集中している」と答えた。

2) 学生の学び

- ・研修員は、養護教諭の仕事を観察して、養護教諭の学校での役割が大きいことや養護教諭のシステムのすばらしさがよく分かったと述べ、私も改めて養護教諭のすばらしさを認識した。
- ・養護教諭の制度について、エジプトでは治療に重点を置いているのに対し日本では予防に重点を置いている。予防すれば病気は発症しないから予防が学校現場では大切だと私は思う。日本の養護教諭は医師や看護師といった医療職ではなく教育職であることを強調して説明した。
- ・日本の養護教諭制度、日本の連携体制を学んで自国に生かしたいというコメントをもらい、嬉しく感じた。途上国にはたくさんの課題があるようだが、日本での学びから少しずつ課題をクリアしていきたいという、その熱意ある姿勢に感動した。
- ・途上国では、政治的、経済的に問題があるから、そこを重点的に対応すべきと思ったが、研修員は資金的に問題のあるものではなく、連携やお金のかからないところを改善して行きたいと述べていてその通りだと思った。日本も負けていられないと思った。
- ・国際学校保健セミナー 2009'に参加して分からなかったことを質問したが、研修員からの質問やセミナーの枠にとらわれずに自由に1つのテーマについてディスカッションを行った方が各国の比較がしやすいと思った。

3) 研修監理員（通訳担当）のコメント

- ・国際学校保健セミナー 2009'に関する質問は、一人の学生が、一人の研修員に質問するという形で行った。これは質問が一人の研修員に偏ることなく、全員が発言する機会を持てたので、参加意識が高まりとてもよい方法であると思った。
- ・日本の養護教諭に対して「みな生き生きと楽しそうに仕事をしているのが印象的。また、仕事だからするのではなく、自発的に、さまざまな改善に取り組み、子供たちの健康増進に尽くしているのが素晴らしい」という研修員の感想を聞いて、学生たちはとても嬉しそうで、先輩方の仕事ぶりを認められ、誇らしい気持ちになったと思った。
- ・「日本の学校保健にはハイテクの部分も多く、貧しい自国では導入することが難しいことも多々あるが、一方で、お金をかけずにできるいろいろな工夫を見せてもらい、とても参考になった。帰ったら取り入れたい」という感想には、学生は深くうなずいてい

た。学校保健におけるハード面と並んだソフト面の大切さ、それを実施する養護教諭の役割の大きさに改めて気づかされ、養護教諭になる意欲をいっそう高めたのではないかと感じた。

- ・全体として、学生の課題に取り組む真摯で、素直な姿勢をひしひしと感じた。さらに自分の興味や質問に対する自分なりの意見を準備して臨むと、研修員はそれを踏まえて学生の興味に沿った自国の実情を話すことができるなど、討論がより活発に展開されるのではないかと感じた。

(3) C グループ

1) 研修員の学び

- ・とてもよい体験だった。学生は私たちの国について事前に学習し、よく調べて来ていることがわかったので、学生たちと一緒に時間を過ごし、学生に授業について質問をしたり、養護教諭を目指す理由について聞くことは楽しかった。すばらしい時間であった。
- ・教育的で印象深いものであった。学生は自信をもって授業に対して真剣であった。学生が調べてきたことを紹介したのが大変よかった。
- ・学生はアフリカ大陸の学校保健について学ぶことにとても熱心であり、実によく知っていた。
- ・短時間での小グループによる討論であったが、関連性のある質疑応答ができた。フィードバックとしての全体討論は大切なことであった。グループ別討論では手順よく計画されたやり方で行われたので、時間が短いものであっても効果がありうまくいった。私たちと討論してくれた学生に感謝したい。

2) 学生の学び

- ・学生から「日本の養護教諭はメンタルのケアも行うけれど、途上国では精神的なケアを行う人はいるのか」という質問が出て、「健康教育を行う先生はいるが、そのような先生はいない」という答えが返ってきたのが印象に残った。
- ・学校看護師や医療関係者と違い、心理面の管理もすることが養護教諭の特徴である。グアテマラの研修員は心理面への活動に興味を持ってくれたが、他の国ではあまり優先された事項ではない印象であった。心身ともに健康な生活を送らなければ、児童生徒は本当の意味で健康ではないと思うし、学校生活、学習活動をするために必要なことだと思う。
- ・研修員は、日本の学校保健の現状よりも養護教諭の具体的なシステムについて詳しく知りたがっているように感じた。世界中に養護教諭の存在が広まればいいと思った。また、現在の日本がいかに恵まれた環境であるかを改めて感じた。
- ・日本には日本の健康問題、ヘルスケアの必要性があ

り、途上国では各国それぞれの問題を抱えていてそれらを意見交換できて良かった。日本はやはり恵まれており、またそれ故の問題もあって、途上国の問題の中には私達が理解できないものもあることが分かり、良い経験になった。

3) 研修監理員（通訳担当）のコメント

- ・養護教諭になるために大学の養成課程で学ぶべき内容について、一部ではあったが具体的なものを見学することができ、さらには養護教諭を目指す学生と討論の場を持つことができたことは研修員にとってとても有意義な機会であった。
- ・学生たちが先に行われた国際学校保健セミナー2009'の発表内容について追加的な質問をしたり、自分で調べて来たことについての質問をしたので、1時間の討論時間があっという間に過ぎた。
- ・学生が研修員の発表を聞き、さらにそれぞれの国について調べて、興味をもって質問をしてくれるというのは研修員にとってはとても嬉しいものであることが分かった。
- ・「学生たちは高い理想と情熱をもって養護教諭を目指している」と研修員が感想を述べており、学生にとってはますます勉学の意欲をかき立てられることになるだろうと感じた。

IV. 考 察

筆者は平成19年3月にJICA 集団型研修「学校保健」コースのフォローアップ調査²⁾に同行し、視察したザンビアとラオスの二国に共通する学校現場における学校保健の課題として、①安全な飲料水の確保、②トイレの使用と十分な手洗い、③日常的な健康観察、④救急処置、⑤教室等の環境整備を指摘した³⁾。そこで平成19年度の研修ではこれらの課題を踏まえて、途上国における学校保健の課題に関する対応策を中心に「健康観察／救急処置」研修を企画し教授した。さらに平成20年度には、本学養護教諭養成課程の授業および施設見学を研修に組み入れて日本の養護教諭養成の実際を研修員に理解していただく機会にした¹⁾。そして、平成21年度は、より研修員と学生の双方にとって充実した学習の機会になるように、学生を小グループに分けて担当国を決め、事前に各国の保健衛生統計情報等を調べた上で途上国の研修員が自国の学校保健の現状を報告するジョブ&インセプション・レポート発表会(国際学校保健セミナー)に参加して、さらに研修員とのディスカッションや救急処置の実習に臨むという試みを実施した。この試みを通して、今までの研修では得られなかった研修員と学生のパートナーシップの芽生えを感じた。

学校保健セミナー2009'では、途上国の研修員から自国の学校保健の現状を中心に研修員の職位・職務、

学校保健に関する取り組みの展望、研修に対する期待等について報告してもらった。途上国では、学校保健(保健室の併設、保健教育、環境管理、子どもの健康管理、安全な水の確保、学校給食等)の取り組みが十分ではなく、子どもの健康が脅かされている現状に学生たちは大きな衝撃を受けていた。研修員の報告を通して、事前学習で調べた各国の保健衛生情報等の数値が示す意味を考察し、途上国の子どもたちを取り巻く環境について理解を深めた。そして、学生自身のおかれた環境を振り返って自分自身の役割や課題について考え、さらに国際保健医療分野における日本の役割^{4,5)}についても考察していた。このようなセミナーに参加することは、養護教諭を目指す学生にとって日本国内の学校保健だけに向いていた視野を世界にも広げ、よりグローバルな視点から児童生徒の健康や養護教諭の役割等について考察するよい機会になったと考える。

一方、筆者が担当した「健康観察／救急処置」研修では、①米国疾病管理予防センター(CDC)が推奨している病院感染対策の基本的な方法である標準予防策の考え方、②ふだんの健康観察のポイントと記録の重要性、③特別な衛生材料がない場合の救急処置について教授した。ブラックライトを使用した手洗いの実演や手洗いの歌の紹介、母子健康手帳や幼稚園の手帳、学校の健康手帳、保健調査票、環境調査票などの実物の紹介、バンダナやふろしきを利用した応急手当の実演などを行いながら説明し、研修員のコメント記録からは分かりやすく伝えることができたかと推察する。

また、本学における学生の授業の見学では、日本の養護教諭成立の歴史や養護教諭養成の歴史とカリキュラムの講義等を受講した研修員にとって、養護教諭の養成の実際を目の当たりにすることでより実感をもって理解することが出来たと考える。特に今年度は、授業見学だけではなく、救急処置の実習に研修員も参加してもらい、養護教諭の基本的な技術である救急処置について講義で学ぶだけではなく、実習を通して学ぶことが出来た。学生にとっても研修員に一次救命処置の方法を説明しながら一緒に実習することで、研修員の参考になり、役に立つことを嬉しく思っており、学生にもよい刺激になったと考える。今年度は通訳を1人から3人に増やして研修に臨んだが、今まで以上に手技や考え方など学生から研修員に伝えたいと思うことが増え、言葉の壁を残念に思っており、いかにコミュニケーションをとるかが課題として残った。

さらに今回の研修では、学生を小グループに分けて担当国を決め、①事前に各国の保健衛生統計情報等を調べる、②担当国の報告を中心に国際学校保健セミナーに参加する、③担当国の研修員とのディスカッションに臨むというステップで研修に取り組んだ。その結果、ディスカッションに対する研修員のコメントとして、「討論は双方向活発に行われ、相互作用的で説

得力を身につけることができる。また一方、世界のさまざまな種類の問題について知ることができ、これは費用対効果が高いばかりでなく、コミュニケーション能力や相手をより理解する力を身につけ、協働の文化を進めることにもなる。」「養護教諭養成課程の学生との討論を通して、学生は子供たちを助けることのできる養護教諭になりたいと強く希望していることがわかった。」などが得られた。一方学生は、「日本には日本の健康問題、ヘルスケアの必要性があり、途上国では各国それぞれの問題を抱えていてそれらを意見交換できて良かった。日本はやはり恵まれており、またそれ故の問題もあることが分かり、良い経験になった。」「研修員は、私たち養護教諭を目指す学生に興味を持っていて、私たちの話をうなずきながら聞いてくれて嬉しかった。」などと述べていた。また、「今まで自分は何も考えることなくきれいに整備された学校へ行き、普通に給食を食べ、具合が悪くなったら保健室へ行ったりしてきたが、それが当たり前ではない国がたくさんあることを改めて学ぶことが出来た。全ての国の学校保健がきちんと整うことは実際はとても大変なことだと思うが、たくさんの子供たちがきちんと整備された環境で勉強できることを願う。」と述べる者もあり、安全な水、適切なトイレ、整備された環境衛生等の確保がいかに重要であるかが理解できた⁶⁾。さらに「どの国も学校保健に関心を持っていて、現状の改善に一生懸命取り組んでいるが、一つの国の力だけではなかなか改善できないものも多く、世界中が協力していかななくてはいけないと思った。」と述べている者もいた。現在、子どもの権利条約に基づいて、UNICEFが中心となって子どものエンパワーメントを目指す国際協力が推進されているが、多くの課題が残されているのが現状である⁷⁾。学生たちは「途上国が目指している養護教諭を目指す身として、私ももっと勉強して頑張らねばと思った。」と身が引き締まる思いをしており、将来、さまざまな方面で国際協力に貢献してくれることを期待したい。さらに通訳を担当した研修監視員は、「学生たちが先に行われた国際学校保健セミナー2009'の発表内容について追加的な質問をしたり、自分で調べて来たことについての質問をするなど、興味をもって質問をしてくれるというのが研修員にとってとても嬉しいものであることが分かった。」「学生たちは高い理想と情熱をもって養護教諭を目指していると研修員が感想を述べており、学生にとってはますます勉学の意欲をかき立てられることになるだろうと感じた。」と述べている。研修員と学生がお互いに相手を理解しようとする気持ちで報告を傾聴したり、ディスカッションで情報を交換したりすることが重要であることが分かった。また、担当国を決めたことで、研修員と学生の間でパートナーシップが芽生え、お互いにより関心を持って意見交換ができていた。今回の取り

組みをさらに発展させて、有意義な研修になるように創意工夫を継続したい。

日本の保健医療の経験は、保健医療の格差をいかにして克服し、貧困から抜け出すかという良いモデルであり、公衆衛生学的な手法の有効性を示すものである。自らの経験を活かして国際協力を強化することが要請されていると島尾ら^{8,9)}は述べており、学校保健を含めて現状の日本の衛生水準に至るまでのプロセスについて研修員に学んでもらうことは、自国の学校保健の改善策を計画する上で参考になると考える¹⁰⁾。途上国における健康の改善は教育の向上につながり、教育の改善は健康の向上に寄与するという双方向的関係が健康と教育にはあると湯浅ら¹¹⁾が述べているように、教育の基礎として児童生徒の健康の保持増進を位置づけ、学校の教育目標の最優先課題として取り組む体制づくりも重要と考える。

小島は、教育という手段は診断・治療のように直接的効性はないが、その効果は一時的なものに終わらず、長続きが期待できる。学童をヘルスパートナーとしてとらえるということである。教師を通して伝えられたメッセージは子どもたち自身の知恵とことばによって、より親しみやすく理解されやすい形で弟妹や友だちに伝えられる。親たちへのインパクトも身近で大きなものとなる可能性がある。そのためには、教師から子どもへの一方通行方式の教育から子どもの自主的な学びの姿勢を誘導するような参加型の教育へと変わっていく必要があると述べている^{12,13)}。野澤も教育の可能性について報告^{14,15)}しており、子どもたちに教育することで子どもたちの意識が変化し、行動変容に結びつき、さらに家族や地域の人々にも適切な健康行動の習慣化を広げていく契機になると考える¹⁶⁾。学校保健の場で投げかけた小さな輪が家庭に広がり、やがて地域全体の取り組みとして大きな輪につながっていくことを願い、まずは、現状の中で一つずつ出来ることから改善するように取り組むことが重要であり、帰国研修員の今後の取り組みに期待したい。

V. おわりに

途上国の研修員や留学生の受け入れ、国際協力の実務に従事する職業専門家の育成等に貢献する役割を大学は果たすべきであると上原¹⁷⁾は述べている。今回の試みを通して芽生えた研修員と学生のパートナーシップの芽をいかに育てていくかが今後の課題であり、国際保健医療分野で貢献できるように個人レベルではなく、講座や大学組織としての体制づくりを目指したい。

謝 辞

今回の研修でお世話になりましたあいち小児保健医療総合センター山崎嘉久氏、JICA 中部国際センター吉

田智香氏, JICE 中部支所山本久子氏, 宮田由布子氏, 森下くみ子氏そして養護教育講座の先生方のご協力に感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 藤井千恵:国際学校保健セミナー 2008'からの学生の学びと「健康観察/救急処置」研修における研修員の学び—独立行政法人国際協力機構(JICA)平成20年度集団型研修「学校保健」から—, 愛知教育大学研究報告(教育科学編), 58, 37-42, 2009
- 2) 相葉 学, 山崎嘉久, 藤井千恵, 野田典江:平成18年度集団研修「学校保健」フォローアップ調査報告書, 独立行政法人国際協力機構中部国際センター, 1-156, 2007
- 3) 藤井千恵:途上国における学校保健の現状と研修員受入事業への提言—独立行政法人国際協力機構(JICA)主催平成18年度集団研修「学校保健」フォローアップ調査から—, 愛知教育大学研究報告(教育科学編), 57, 45-53, 2008
- 4) 宮城島一明, 中原俊隆:国際保健医療協力の視点, 公衆衛生, 66(4), 232-238, 2002
- 5) 山本太郎:ODAを通じた保健医療分野における日本の国際協力, 保健の科学, 47(10), 740-744, 2005
- 6) 城川美佳:「命の水」獲得活動の国際10年, 2005~2015, 保健の科学, 47(10), 753-758, 2005
- 7) 勝間 靖:子どものための国際保健医療協力子どもの人権と UNICEF, 小児科臨床, 58(増刊), 1305-1311, 2005
- 8) 島尾忠男, 石井 明:公衆衛生学と国際保健医療学, 日本公衆衛生雑誌, 49(1), 3-5, 2002
- 9) 石井 明:なぜ国際保健医療学なのか?何が問題なのか?, 保健の科学, 47(10), 700-705, 2005
- 10) 大西真由美:国際保健医療協力と計画・評価, 保健婦雑誌, 58(11), 966-973, 2002
- 11) 湯浅資之, 中原俊隆:ヘルスプロモーション戦略に基づく統合型学校保健政策(FRESH), 公衆衛生, 70(11), 900-904, 2006
- 12) 小島莊明:日本の国際寄生虫制圧戦略, 医学のあゆみ, 210(13), 1081-1086, 2004
- 13) 友野順章, 小林 潤, 永井伸彦他:学校保健を基盤とした国際寄生虫対策プロジェクト—小児科医の国際医療協力における役割の一つとして—, 小児科, 44(13), 2139-2144, 2003
- 14) 野澤幸江:子どもたちの行動変容をめざして, 保健婦雑誌, 58(11), 938-944, 2002
- 15) 野澤幸江:循環する保健活動—タンザニアの子ども達の行動変容を目指して—, 国際保健医療, 21(1), 7-11, 2006
- 16) 深井穂博:子どものための国際保健医療協力—小児期の口腔保健, 小児科臨床, 58(増刊), 1407-1414, 2005
- 17) 上原鳴夫:国際協力における大学の役割, 公衆衛生, 66(4), 248-251, 2002

(2009年9月16日受理)